詩
子寄
次月令博物
全
春部
四

春部目録

（印は春三月ごとゝる季のものの多ノ有

△春氣　△白候　△養生の法等十九ヶ条

△春風　△東風　春ノ一丁

△春雲　△春の天　春ノ二丁

△遲日　春ノ三丁

△紙遊　春ノ四丁

△春月　△朧月　春ノ四丁

△春夜　△春朝　春ノ六丁

△春夕　春ノ七丁

△春與　△春望　春ノ七丁

△春山　春ノ八丁

△春野　△春郊　春ノ九丁

△春海　春ノ十丁

△春川　春ノ十一丁

△春雨　春ノ十二丁

△霞　春ノ十四丁

△あゆ　春ノ十七丁

△長閑　春ノ十七丁

△水ぬるむ　△水ぬるい　△そこなし　春ノ十七丁

春の雜

此部ニハ春三月ノ雜事をあつむ

△佐保姫　春ノ十八丁

△木地爐縁　春ノ十八丁

△東宮　春ノ十八丁

△霞洞　春ノ十九丁

△雙調　春天氣　春養生ノ十九丁

△春ぶるや　△春ふる　△春ふる　春ノ十九丁

春の草木

春の部ニ入れども国地印ニハ用ひても可なり

正月ハ用ひても可

△柳　春　九丁
△芹　春　九三丁
△薺菜　△菁菁　春　九四丁
△蘩蔞　春　九四丁
△椿　春　九四丁
△蒙花　春　九四丁
△蕗　春　九四丁
△蒲萄菜　春　九四丁
△蕨精草　春　九四丁
△素菽皮　春　九四丁
△雞菜摘　春　九四丁
△山葵　春　九四丁
△獨活　春　九四丁
△三葉芹　春　九四丁
△蘘荷の花の句　春　九四丁
△海苔類　春　九五丁
△鹿角草　春　九五丁
△石蓴　春　九五丁
△種植　春　九五丁

春の生類

春の部ありしものハ二月ふも用ひ

△鶯　春　九六丁
△鳥の囀　春　九九丁
△百千鳥　春　九九丁
△目刺　春　九九丁
△鷽　春　九九丁
△駒鳥　春　九九丁
△雲雀　春　九九丁
△干鱈　春　九九丁

春目録終

春之部

△此印あるハ春三月どうり季へ

春時令

此部ハ春三月ふとなる季の物をのす

△春風　○東風○春吹風いのどろみ　そもつ　ものの

春風ハ地下より吹上て地中の生理を発出し曠野青〻是春の應なり○

巳卯ハ風なけば其年大風あり

五月西春ハ南ハ秋ハ北ハ

東風ハ雨なるとき　ようどころ

哥ハ俗説ハ

なり春ハ木なり南ハ火なり南

風ハ時節の氣より相生ス

方の風ハ雨となる方角より時

節の氣と生ずれば晴北ハ水春

ハ木なり水生木と生ずるなり

北風なれば晴なり尤西北の風を

乾風ハ四季とりふ晴なり東

北の風ハ常ハ雨になるハ

ども春い北風こそ晴るゝと以て東北こゝぐも雨よるゝ〜ば申酉の風とまぜこゝの常に晴とはさどあこゝぐと春は南風こそ雨とるゆへ未申にるこゝば羊頭こゝて雨よりなるあり

(哥) 拾遺　躬恒

吹風とあふひらひえん梅乃花
らうこゝる袖そ香ひまさりける

同　春風不分処　後京極

おゝ多へて氏の家ごとに打ゆびき
君が世代よい長うぞそゝく

(詞) 朔氣。ゑるまち。まごら。

(俳) 春風や三條の松こゝ清こゝる　鬼貫

(詩) 春風　五字對句

煙花宜落日　春風開紫閣
エンクハヨロシクラクジツニ　シユンフウヒラキシカクフ
カスミ　イリヒ　ニカイザシキ

絲管醉春風　大樂下朱樓
シクハンエフシユンフウニ　タイガククダスシユロウニ
イトタケ　ハナヒザシキ

(詩) 春風七字對句　詩礎

只言啼鳥堪求侶　搖春風
ヤウタヘモトムルニ　ウヒクノシユンフウニ
トリサヘモトムルニ

無那春風欲送行　野外昏
ナシイカンホスルシユンフウホツオクラトカウ　ヤクハイニクラシ

春風夜動蘿衣薄　度春風
シユンフウヨウカクライウスク　ワタルシユンフウニ

芳樹朝催玉管新　逐春風
ハウジユアサモヨホギクスハンアラタニ　オフシユンフウニ

霽日滿江寒漏靜　動陽春
セイジツミチテエニカンヒウレツウニ　ウゴノヨウシユンニ

春風遶閣白蘋生　待落梅
シユンフウメグテカクラハクヒンレヤウニ　ヘツラクバイフ

寒雨送行千里外　任好風
カンウオクルカウフ　サンリノホカ　ウヲ　ホクニ

東風沉醉百花前　舞東風
トウフウチンスイヒヤククハノマヘ　ブトウフウニ

(詩) 春風ノ詞　高遠

明月斷魂清靄々平蕪歸路
メイケツダンコンキヨウアイく　ヘイブ　キロ

緑逕々 此二句春月ノ對句ニ出ス 人生・莫遺・

頭如雪縱・得春風亦不消年ヲ

頭雪ノ如クナルヤウニナキ用心アレ
頭ノ雪ハ春風ニモキヘザルゾ

春雲

風ノ同ジ西風吹ノ
ヤハ先雲西ヨリ東ヘ行

又降晴ト云フ事風ノ方角ト
同ジ西南ヨリ東ヘ行ト出雲ト
いへ晴ヨリ東北ヨリ西ヘ行ヲ
入雲ヲ入テ雨ナリ或ひい東南
東北ヨリ雲ト入ルモ雨西北
西南ヨリ雲ヲ出ヲヒ晴西南
トヘ入ルモ南ヘヨリ未申のあひだ
より雲出ると沖氣といへて雨ヨリ

(詩)ヲ広ふ入ル雲も強ク流ルん
ヲ百の炭ヒ花の ちゝ雲 法皇

(詞)雲おびく。雲ヘまぜ
て。くも間、ゆふのふ。雨ヲも

春天

(詩)春の空いづ是のぐ之
草庵集

(詞)草ヲ分テ入ル雲ヲ田子の浦ふ
おおてくもれば山の陰ヒ

(俳)春の空 細さ雲の間ヲ見ル 其雲

(詩)春天五字對句 同上

碧落・三天外 山川・乱雲日

黄圖四海中 樓閣入烟霄

(詩)春天七字對句 詩礎

雲斷岳蓮臨大路 樂春天

天晴官柳暗長春 兼煙霞

山河杳映春雲下 拂春雲

城闕參差晩樹中 入洞天

春日

哥 北山殿
足引の山路ハ晴て去の立日影の今朝もかすみぬりけり 為世

兼久百首
から衣春たちにけりとしうら日のうらうらと霞けるかな 忠房

詞 めぐる。出る。天津そらの新。日和のどか。まめらしのどけさ。うつる。霞の山路に日影。霞ひさしむ

連 千里にも安らへき春日かな 宗春

俳 ひとつ来て出ぬも梅や春日和 鬼貫

手をつけて春の日や庭に雀の砂あびて 嵐雪

狂 日のながき世ハ柳桜に都鳥が浮かれさてゆく春の山 数二

遅日 ちじつ おそきひ

△永日 △暮遅 △暮おそき春の日なと。右いづれも春の日ハながく暮がたき日の心へ

哥 新古今
我心春の山辺にあくがれてながながし日をけふもくらしつ 貫之

六百番哥合
夕暮におもひけさの朝がすみとしのながき春日ぞそでたるん惜もすれ 有家

万葉集
うらうらにてれる春日に雲雀あがり心かなしもひとりしおもへば

詞 夕暮。春も暮。くれ遅く。千里の花で名乃跡。みさらみ。花乃宿

俳 傘張の睡り胡蝶の宿り哉 重五

遅き日のつもりて遠きむかしかな 蕪村

狂 青柳の糸ながらへて春の日をよこに織なむ月ながさかな 二橋

詩 遅日五字對句 同上

彩雲歌處斷 遅日舞前留

遅日曬方照 高齋淡復空

詩 遅日七字對句 詩礎

桃源洞裏居人満 淑景移

桂林山中佳日長　仙山

春風自信牙檣動　ホハレラ

遲日徐看錦纜牽　ヒモヒナ

迎春遲　ハルヲマチカネル

對斜暉　イリヒ

日光遲　ヒアルガレ

糸遊　遊糸。春の日のゆるく時空をとゑまい糸の乱れるやうなものをいふ。陽炎。野馬。日かげ小塵の乱れて馬の走るやうにも。荘子に野馬ハ塵埃なりとあり

（哥）六百番

うつろへる春の糸遊　定家

おるまくもなくなるけぶり

春月　朧月　おぼろにして艶なる物へ

（三）新古今

ながめもてあかぬ春の夜の

撞月よ春くるのぞれさ　大江千里

同

雉鳴く霞の沼のかきつばた

うつるも人なる影月夜さ　源具親

夫木　春山月

むらゝ山春のくれゆくあはゆきの

月にくもるゝ霞なりけり　入道摂政

同　後九條内大臣

涼き夜の春ゝ月ゝ

春乃あけぬるの月いとゝ

同　定家

たちかへるおぼろ月夜の霞ゝて

春ゝ月ゝをばゝ

續古今　花洛春月　家隆

春やゝ月ゝ花の盛りの名のうゝて

春やゝ月ゝの月ゝ風もあかりぬ

風雅　河上春月　有兼

ちるゝ花ゝ流のつゝ

川春ゝ月ゝ月ゝかを

夫木　為氏

ゝ花ゝ春の春ゝ月ゝ笑ゝ

おゝ月ゝ月ゝ花ゝ月ゝ

同　霞隔月　宣房

月ゝ霞ゝ月ゝ春ゝ月ゝ

㊂詞 ひかりはあらぬ またれたるの月

霞にくもる。霧のそこ。夜半の月。朧月夜。隣の声。のどか。おぼろに見ゆる。曇りもやらぬ。わか葉にうつる。ひかりなく。雪げの月。かすみの袖。なれゆかし。

㊂連 霞ひとへも雲となりぬ花の有明 紹巴

㊂俳 象に合ぬ月鏡や朧月 其角

「 坊は二部隣る朧月 十磨

「 天の原おぼえし月や花の色 宗因

「 まこの夜乃月は霞しやすくはび 三州

㊂詩 春月七字對句 詩發

何尹天明坐莫辭 懷清霄

春城月出人皆醉 月朦朧

明月斷魂清靄々 照野梅

平蕪歸路綠迢々 影含烟

㊂詩 春月五字對句 同上

苔澗春泉滿 琴伴前庭月

蘿軒夜月閑 酒勸後苑春

㊂詩 春月詞 劉方平

更深月色半人家 北斗闌干南斗斜

今夜偏知春氣暖 蟲声新透綠窓紗

秋ノ月トチガヒ夜深レトモアタヽカニアリトゾ

㊂詩 同 諸光儀

映門淮水綠 留騎主人心

明月隨良椽 春潮夜々深

月モ君ニシタガフテ西ニユキ潮モソフテ夜ニフカクミツルトナリ

春夜

夜朧

㊂哥 續後撰 久我太政大臣

[illegible]

風ふけばつゐも花の香をとゞる
詞 霞む山の端。霧ふかき夜。春ゝ。
ゆゝしき花の雲はあやなし。ゆゝしき花の雲。
俳 霞やゝ人ぐもるる新ぞうし
狂 人目さへそうとやゝ春ぬるの
おぼろ月夜ふかくゝりのかな 可由

春朝

三句 新古今 藤原家隆

霞ゝ川末の松山ゝ月
くゝ鶏ふかぬ句ゝ撫子雲ぬ

詞 春の曙。かすめる空。のゝけさ春
の朝。霧きさえ。霞まぬ。霧ぬ。
霞沼。末の松山。ゆゝしかとむ。杵の音

俳 朝の間の梅ゝ香も来て咲ぬ 移竹

詩 春朝七字對句 詩礎

華堂翠幕春風至・曙光寒
繡閣金屏曙色開・送暁鶯
春浮玉藻寒初落・月未収

露拂金莖曙欲分・入晨遊
詩 春曉ノ詞 孟浩然

春眠不覺曉・處々聞啼鳥 春ハ
多キユヘ夜ノ明ルヲ知ラズ鳥ノ夜
啼クニフトオトロキ目サムルゾ
来風雨聲花落知多少 父ヘ雨風
ヲキ多カ定メラ花モヲチチリニレト思フナリ

春夕 春の夕べれとらふ
暮春ゝ春の末へ

三句 玉葉 乃子

百ふる声のどかそて遠をの
山ゝ霞める春の日ぐゝし

詞 夕べれ。雪かゝる。雪ふる。
夕霞。夕日かと見る。雪ゆゝき
連 梅ゝ香ゝ月夜。不知
俳 滿さ山ゝ春ゝ春雪 五綾
狂 山寺の春の夕暮れ入相
のゝ入れ夕ぐれ入相 前大僧正慈圓
詩 春夕七字對句 詩礎

緑水殘霞催席散　隔暮雲

畫樓初月待人歸　夕陽遲

小苑廻廊春寂々　散餘暉

浴鳧歸鷺晩微々　目覺閑

春興　春野山を遊びて興を事とせり　家隆

(三)　新古今

ちるぶぐちそこともたどる行方なし
花の香ばかりぞ残る

(詞)　梅。柳。下枝。花。ざくび。散べ乃。

春望　春のおもきは海川野山とも
しらぬ　ろくがめのぞむ心べ

夫木　羇中眺望　有家

むさ〜ぬ〜のべ乃草はいめもそるふ
そらにみぐろ乃名もわれぬと

(詞)　ちろ。幾字もかとむ。かとと移

春の山川。乃のうれる。詠ぜる。
見ぬ。れの春。多めも幸ひ

(詩)　春望五字對句　同上

白雲囲望合　城闕千門晩

青霭入看無　山河四望春

(詩)　春望七字對句　詩礎

白蘋楚水三湘晩　樹中分

芳草秦城二月初　春色明

近郭乱山横古渡　景物滋

野莊喬木帶新煙　接人烟

(詩)　曲江春望　唐　盧綸

菖蒲翻葉栁交枝　暗上蓮舟

鳥不知曲江水　景ヨキ所ナリ栁モ枝レ

ゲリ菖蒲モ葉サカヘテ夏チカク春モ末ニナリ采蓮ノ舟ヲ催スコロニモナリ

更到無花最深處 王昌齡

レリ

金殿影參差花チリハテ、タヾ見ルモノハ金銀ヲカザリシ樓殿ノカタダカナルカゲノミゾ

詩 西亭春望 西亭ハ西宮向ヒ宦安ノ居ル宮殿ゾ 王昌齡

日長風暖柳青々北雁歸飛入官冥 春モ半スグルコロ雁ノヲノガ古サトニカヘラントト雲井ニトブヘ

岳陽樓上聞吹笛能使春心滿洞庭 笛ノ音ヲキクニツケテ故郷ヲ慕フ心イトヾ切ナリ

春山 春ハ艸木モさかえて山のすがすがしきおもかげ

忠岑

(三四) 拾遺

まがきのうちのさくらばやこぞのはるにもあらぬ山もかすみけさかな

天木 春山霞 家隆

依保濃の名にあふ山のけさもかすみぬ春のあけぼの

山家 深山不知春 藤原公重

雪分て外山の谷はうぐひすといふなるの里は春やつぐらん

詞 春の山ぶ。山の端うるむ。遠山ぶ。うすく雲。こえわたる谷ぶ。はるかなる。やまちぶ。はるのやま。とおもふ山。山もゝ

俳 はるくさきの山ぶ。春の山ぶ。

狂 四方山は霞のそらにとうとうと

春山五字對句 同上

詩 緑野明朝日花雜重々樹

青山澹晚煙雪輕處々山

詩 春山七字對句

井轉轆轤千樹曉滿春山

鎖開閶闔万山春隔暮雲

遠山積翠横海島 五嶺春カタイナカ
残霞飛丹映江濱 花滿山ハナミツヤマニ

詩 春山ノ詞 劉商

君去春山誰共遊 鳥啼花落水空流
君カヘラバ花鳥ノ風景モモノサビシク流水ノミアリテ物カラン

如今送別臨溪水 他日相思来水頭
今溪水ノアタリニテ別レ思来水頭ヲ遡リ来後日此流水辺ニ相思ヘトナリ

春野

哥 万葉 春のゝふ

もえいでくるかすがの野 春のゝふ
我そ先つむ人なしに

詞 まさて。春面ホそむる。ゆゑく
らし。道乃辺。みぞうそん。
もゝく。れば為夜。れば月。
かとゞ野。是まさて。春こゝえ。
沙更とり。かとみ。雲間。と

ろゝ。ゆゝ人さ。みれ日。つゞる。
もとみ主。りもゝび。野遊。芙弱。
糸柳。さゝゝ。雉る。雲雀。
青面。梅。柳。屠。ゆくゞ。

俳 むつそい指く主乃麦 来山
春ゝさや堺のゆきゝゝ桶 黛山

詩 春野五字對句

同上

臺榭春光媚 野竹池亭氣
郊原遠樹平 春花澗谷香

詩 春野七字對句 詩礎

聽雞曉闕踈星白 落芳塘
走馬春光細柳黄 入平蕪
田夫就餉還依草 野外烟
野雉驚飛不過林 春色深

春郊

春の野乃事そう

六百番哥合　隆信

[illegible]人のたちぬ山のはるしきて
別ぬる野邊のくるのかげる

続古今　　柿本人麿

[illegible]ふ春くれぬ日のあをみそめ
小まつがえにふる雪のしらかび

(狂)[illegible]
つむ糸あそひもたれこめ　鷹師

(俳)揺籃をくやはるかぜ　六吉

(詩)春郊詞稜粹

水遶江渠漸有聲　氣融烟
塢晚来明　水声キコヘ野辺モ春ノ
氣令ユキヌルブ

春海

春はかすみたなびきて
海のけしきものどかなる

(哥)　四季百首　　定家

白菜の白ひー秋も[illegible]
物ゝてふ雪の去れうゝ風

(詞)春はうこと。霞たなびく引。とか
ゆる。霞のひま。霞ふるとゆる。
浪の花。[illegible]
とゝる。なを吹上のこの。緑なる。
春の浦く。田の海のどゝ。

(俳)ちる紙のゆれをう[illegible]海花縣

(詩)春海五字對句　　同上

月明三峽曉　氣清連曙海
海深九江春　雲白洗春湖

(詩)春海七字對句　　詩礎

山入白樓沙苑暮　渡江春
潮生滄海野塘春　遶春流
雲夢夕陽愁裏色　染湖波
洞庭春浪坐来聲　洞庭春

春川

川ハ梅櫻の水ながるゝ川をいふ。すべてあたゝかに花のちりうかめる体。雪消て水まし さかんに流るゝ体などをうつしよめり

㊂哥 夫木　　公経

六田川岸の柳のうつれ棹 わくかげなれる瀬ごとにぞなる

㊂詞 春のさゞなみ。わのく霞む。春のあけぼの。樋おちゆる。ちゞむ氷。ゆるみそめ。せうもそくぞ。岸のやなぎ

㊂俳 川そひや鷺も緑のつまる川　仙鶴

㊂詩 春川七字對句　　詩礎

樹色到京三百里（ジュシヨク ミヤコニイタル ミチ三百リ）　　渡水人（ワタルミヅヲ ヒト）

河流歸漢幾千年（カリウ カンニカヘル イクセンネン）（カンノ代ニナリテ）　　逐水平（ミヅヲタヒラカナルニ）

湘潭雲盡暮山出（シヤウタン クモツキテ ボサンイデ）（川ノ名）　　盡清流（コトヾクセイリウ）

巴蜀雪消春水來（ハシヨク ユキキエテ シユンスイキタル）（国ノ名）　　弄晴川（セイセンヲモテアソブ）

春雨

春雨ハ音なくしめやかにふる物をいへり

㊂哥 建長百首　　良教

春雨のふるびく岸の青柳は うけてもしらぬ露ぞこぼるゝ

新後撰 庭春雨　　大政大臣

逆綾にかゝるのかられ庭のふる春を 音さへしのぶ庭のまさご

夫木 旅春雨　　知家

旅衣ぬきてぞ神は春雨の 霞に曇る道の行末

㊂詞 ふりくる。しめやか。なれぬ。しほるゝ。かさくれ。かきくもれ。かゝれる。そゞぎ。日を経る。このめ春雨。春のみどり。あをやぎの芽。めぐむ若草。霞より緑。くもる花。ぬるゝ夜のうるほひ。花を見ぬ。物うき。雲。嵐。風。春風。東風。

来る。笠かさもろくあへぬ。のぢ笠の雨。偽る社の紀日上 夕雨はれくさ。雨の日ぐらし。夜雨の聚。雨夜。国樹。

灯の光りも志賀る。軒雨そそぐ。彩れ出る。彩の雨。彩の雨。水の下嵐。旅樵衣。ぬぼ。ぬれ。

笠の春雨。橋の長雨 意 佳人のさハつ。来ぬ秋ことりる。涙雨を志る雨

(連) 寒雨の野山をそむるとれ汁宗養 寒雨のおとはのきはの竹まふ小紹巴

(俳) 春の雨花をいそ紀の雨待汁宗水 春雨やうゝぬ家ふもうとん桶 来山

時雨にぬれぬ人やあるの雨 其角 春雨やよはゝひまき四人の髮 十磨

(狂) かきつのり嵐ふうるる春れそゝく。 さびゝゝさまはるる雨中ちゝく 走帆

(詩) 春雨五字對句 同上

野館濃花發 海暗三山雨

春帆細雨来 花明五嶺春

霞

△春霞 △初霞 △一叩すみ

△霞洞 △霞海

みゝゝ。 △霞網 仙人の酒と流霞と △霞汲

△霞衣 △霞袖 △八重霞 八重ふかさ

△鐘かすむ 分れの声の霞 △霞関 名所。霞谷市のと以上二名非季

右いづれも霞のこと。○春の時空中おぼろ。て曇るる如ある。

とりの本字ハ霧。或ハ蒙とか訓ずるあり

(連) 江上の海風霞 肖柏

(俳) 武蔵ゆふ今朝一さの霞 無良

山吉のあり降よう 松をあて花ハ霞ふ

綱ゝ山ゝ山ゝ山ゝ

(哥) 夫木

みゝゝのハ春ハ霞ハ立ぬ

定家

清水ふきあるゝ白雲

同　野径霞　仝

春日野のかすみの石山風ふき
ちらすうぐひすぞ鳴

建保百首　海霞　仝

かぜたちぬなびきもてゆくあまをぶね
うきみ山ぢにかすみのうらぞ

建暦哥合　山家霞　為家

谷の戸をたのもしがほの色あるまきのふ
かしてかすみのうすの多ふ

夫木　海辺霞　参議為相

ふるさとの花をまさぐる波路にも
かすみを出て帰るふねと

続古　朝霞　家隆

春の夜のおぼろ月夜はなごりをも
出る朝日もなほうちしめり

夫木　河辺霞　成茂

水とりやさしの柳乃ふかみどり
うすくもの霞の色ぞ春

建保哥合　野霞　順徳院

むさしぬやかすみ
なびくはるの野の

遠ざかる。滅火がまむ。霞むけぶり。堀
ぬの煙もうすぬ。浦く霞む。関屋
ぬ戸ぬ。霞ふる。霞をたのもしぬ
詠人　森本氏の桂もうすぬ。風ふき霞。
里里の煙もうすぬ。里遠くかすむ。
我ぬむ里ぬ夕霞。河辺の春ぬ。
霞ふむ。この浦。この柳をむ。岩浪
うすむ。橋霞をぬ。霞に中た
ぬる。霞ふかぬる。霞て遠き川端
日の長雨にうすむ。霞をまぬる。ゆ
ぬをぬぬ。雨ぬ。うらくかをむ。ぬ
ぬ。春ぬ。花花の枝と
かぬと。霞ぬ中に白ぬ春ぬ柳。山家の
柳をむ。この柳ぬ。霞ふかく風
なぬてぬ。梅。梅の枝をむ。立
枝ぬ。霞の中に白ぬ。赤ぬ
松風ぬて。松原ぬ。檜原　桂家ぬ
ぬ。付　春の柳ぬ。

居所霞の窓。ゆゑむ彩雲。霞のふく
かさむ。霞む垣根。衣霞の衣。伏保
姫の衣。霞みの袖。旅霞。山のうすき
はるまうの。古里霞。うらもむ。彩方日
うゑ。郭れ山。かすと無常。弥辺霞。
山霞。霞ものもの。霞の。戀霞。
あらうとなるみ。霞。そそ
(狂)九重と春の霞れあの月ふ風
なるうてやけのどうあり 女風
見ゆて雲のうれもとうきれ
なるかを数て霞うん 法心上人
○詩ふ作る霞と本朝の哥ふ
詠どる霞いちうり歌連俳ふ
詠して春の季ふ入るい蒙とふ
をのみて霞と詠と春の比天
氣の霞るをいふ又詩ふはふ
霞い朝霞晩霞のるい本朝ふ
ていあさやけ夕やけの事ふて
今いふかとその事ふていう

霞(あらう)是い詩ふつくる霞(かすみ)ふり
本朝俗ふいふ朝(あさ)やけ夕(ゆう)
けの事ふ。日のてるとき東の方
赤くてきへうい早くきゆる
い雨ふるこそ。一面ふおろい
二三日の内ふ雨ふるあり日
の入るとき西赤くい南へまろる
い晴るり。かすうの事奏
くい本篇博物筌といふ書
物ふのぶるゆへふい畧に

(詩)霞五字對句

同上

霜空澄(アウクウスミ)・曉氣(キヤウキヲ)
霞景堂(カケイカヤクハウシヨウニ)・芳春(ハウシユン)
聖藻(セイサウタレカンロヲ)・無寒(ナシカン)・露(ツユ)
仙杯(センハイオツバンカニ)・落晩霞(ラクバンカ)

(詩)霞七字對句

雲開(クモヒラケテ)・日月(ジツゲツノ)・臨(ノゾム)・青瑣(セイサニ)・巻曙霞(クショカヲ)
風巻(カゼニマイテ)・烟霞(エンカノボル)・上紫微(ジヤウシビニ)・晩霞多(ハンカオホシ)

遠山積翠横海島　趨紫霞

殘霞飛丹映江湄　向晩霞　仙菜

△長閑　△暖△温△麗○春の日はさむきのうしひもなく天氣ほゝゑみよく和暖ふるのうるをいの△麗も同じ心なく百花咲乱をてうりきと云心と始めり

永福門院内侍

(旁)玉葉

をちこちの花乃かゝりもやゝ見えて
ゆる春のうゝそのどけさ

(能)河津風紅みのどけき和国の東〻〻ひや田の水きらるなり一有

△水ぬるむ　△いてそめるハ水あさか△春の氣をぬるむゆく

水ハ陰氣のゆるのゆく冬ハかくまるて氷とまるる春の陽氣と得てゆるむりのもりのもり

(能)水ぬるむ吹いりよ恋ひもあり　阿誰

(詩)水暖五字對句　同上

春風增風色　川原通霽色

麗日發光華　田野徧春容

(詩)水暖七字對句　詩題

旌旗日暖龍蛇動　居住閑

宮殿風微燕雀高　雲過遲

芳郊緑園春晴散　趣轉閑

復道離宮烟霧生　玉生烟

春雜

此部ハ春三月ニ見ル混雜の物とのす

佐保姫 春の造化の神也 かくらあるにあらずば天地の色とあらるとかりみむづ事さるかり神下集に四季の姫は

(歌)あらし佐保姫の吉野の山にはなれて代と変るや声わくらの滝

(注)当庵さを姫のまろもきさ紅名も ちるゝ霞ふさゐる春のよう殆頓阿

(詞)春の両々人の風。ゆくまで佐保姫の霞は衣。さを姫の神せ深るる。

花咲山のどうらのうさえ人音

(俳)佐保姫の家作り也 宗俊

(紅)さを姫の霞ろ衣めんこ一ゆ

けさ仰すゝうの紅みみ 走帆

木地爐縁 数寄屋 いの炉茶人

冬は炉か塗ものと用ひ春は木地を用ひ春は自然とかうこれよつき塗ものもいかこうりなこ

こうゝきなりつてこうり

東宮 春とうぐうをしても春は東と王宮ぐうゆへ季なりいまゝ御即位なき親王の御事と申也

霞の洞 天子の御位と

とぐゝをゆへと仙洞と申奉るその御事なり季か用る霞の洞は仙人の居所なれは目出度なゝ奉るへ

雙調 春の調子 なり春は方物と生もる其音は木音なり内裏ふて舞楽ある時春はこの調子なれば

春かあぢや (歌)雪玉集 いそのかみ

ふるとうへをはもやこ

あゝは荒田のさふあらや 春

春ぬ (歌)伊勢物語 月やあらぬ

ぬまやむしみ

あゝは我身ひとつは

はりうのふるく 春ぬ

(歌)俊成卿百首 玉

雪も春ぬ紙ふの

春ぬ地は

春養生 素問曰く春三月これを發

陳しつゝ天地共ふ生し萬物以て榮ふ夜いり臥う早く起き庭にひろゝ歩し形とゆるやかにして志を生ぜし免よ生して殺すことみれ賞して罰をすることなかれ是養生の道也

春天氣 春の初甲子晴き天氣ぢゝて上雨ふれい

春中雨多し此日ぢうの事にあらず春い物の氣先ふれば年中の風雨もこれに準る事多し殊ふ甲子い干支の始なきば此日の晴雨も多くつゞくなり春の南風い雨をもべて春の雨い歌ふも詠如くふりく降續くりめと晴んとそい四方九山の根雲ちぎれ立登るこ此時風い東ふ替ぶし又北ふ吹上て日和かゝれい晴ると云共寒くして四五日の内まゝ雨あり

春草木

此つゞき春の草木あれども如此ちゝしろい正月の李ゝ用ゆるもの色ちゝ多くあり

柳

△楊ゝ柳 △川柳

△川そい柳 同 柳ゝ 一書柳 △書柳

△ちゝ柳 △こぶ柳 ちゝ山谷ゝ

柳 異名 金絲。白綿。点花。弱柳。楼聖門の柳 五柳先生とゝふ柳の異名とゝ柳ゝ名ゝ

△王拝 玉ゝいい柳 △風見草 △風無柳

△根水草 △めぐり柳 初春ゝ芽のいろ

△柳の髪 柳のうつくしき女の髪ふたゝ

△柳ごし 美女のこゝろ安 美女のこゝろ

△春すゝき 春すゝきゝ

△柳の眉 美女のまゆゝ

(三百) 万葉

柱なくむつゝのをどの川をゐぎ
祈もこゝろゝれとあうゐ君うを

人丸

堀川百首

もかり紅ふつ志めるいこゝろせよ
いのそい中るぎ風ふたみゝ落

後頼

文治百首　定家

遠くより見みどりなびくふるさとの春の柳の色ぞ中だ

夫木　岸柳　伊勢大輔

玉柳のいとぬいくくふひくかぜ遠くこそとくまわりけれ

夫木　杜柳　匡房卿

ちくとへてみるそしぞふるさとの春のいとようかくるる柳のもり

建長千首　河柳　光俊

ぬばたまやくもかさまきれいる玉川のいでぞ柳えぞぞるうれく

建長百首　水卿柳　仲正

里を紀淀の河瀬れうるおもむきやづへとぐとうかつくせよらら

夫木　水辺柳　家隆

立田川春まちたいあれどかくあるのいろをもそらこそ青柳

同　閑居柳　兼宗卿

紙窓のいろりく柳うちなびくとるるざのるのいとくくれ人りまく

詞　ふびく。新そんてよるる。野辺の柳。美濃。路立ようそる。

紀人もまとるる。まを柳の陸ふむた。河岸の柳。川そひ柳沿にひる高。

ぬまそをを。沼の手にまぶふ底る

新をを染みまるふ。地蔵の柳。砂

とけて新るる。波ふるを堤慌乃

柳。さく柳。ふ柳。離まど紀ふまび

を。鶯のそひ垣かきの柳。恒振乃

柳。庭竈柳。門門の柳。たが柳。田

門田ふびく。糸柳の糸。青柳の糸。

柳眉の糸。深の糸。花田の糸。風ふる

ふ。ふりく。うちそる。風風ぶり

なる。柳の枝ふる。春風。柳ふる

春風。春ふみぞる。風ふるる。風

ふまする。髪柳の髪。風ふる。み

ふる。髪。柳の髪。眉みどりの眉。

眉まる見。柳の糸。眉こより。

引眉の糸。露糸に玉ぬく。

る。柳ふる。柳ふる。ぬきぬ

霧ふかし。風たゝざる。霞たなびく。

霞の表そめて 烟けつる柳。々る春の

柳 柳のそよめきこと。烟の如く霞の如く 蔓本花

さく柳。ようかる梅 柳。枝も旬今を

風櫻 枝ながら。柳の糸。ながれさゝめて

風よろめき 棹姫 さか姫の名 又は海の糸 又は海の

遠村。誰宿の新婚の柳。雅楽の姫柳

遠く近く家一用 霞後吹る。やとをなびき。

風しらべ。兩にみどり。故郷 ふるさとの

みどりの柳。侵人もみさき新緑。山 霞又は

ふかく 柳 青 柳のうつくしき。入江の柳。家の前 柳。新の

青柳。池の柳。苔柳。柳みどり。

ひく柳。川柳。ちくうの柳。柳の眉。

柳の糸。めづら柳。新柳。柳の髮。

(社) 春社日の蓋柳。しろ柳のかを

柳のうつくしむる風乃ゝ 行風

猿沢の柳。さこく新 ありくく

日ゝ。ありて新うつけり 常楽菴

(連) 引とまるゝ柳や陰ゝ 春泉 紹巴

柳うゑやゝ ひゝ 春の風 宗祇

(俳) 柳ちるしなとゆびて 傾城の賢をはいこの柳ゝ 其角

柳ゝ 其角

柳ゝ 柳ゝは 拾ひ ゝるまゝ ゝ 兎貫

川ぞゝふけ ゝき 後つゝ 柳引 移竹

朔日ゝ ゝ柳 乃 新く 匂ひ ゝ 持ゝ

ゝ 吹風 ゝ ゝき 柳 ゝる 宗因

蓬 ゝ 麻 ゝ 柳 ゝ 十磨

柳ゝ 風 ゝ ゝ 柳 ゝ 麥和

柳之 故事 十圍 (レウ井) 桓温北征シテ金城ヲ經テ瑯琊ヲ治

八九時ウヘシ柳十圍ナルヲ見テ慨然トメ曰木猶如此人何ヲ以テカ堪ンヤト

云テ枝ヲ拳テ泣 百尺 (ヒヤクシヤク) 階ノ高煩

然トシテ涙ヲフガス

殺提シトキ家ニ拝樹アリ高サ

百尺バカリ車蓋ノ如シ父老相イツ

テ此家當ニ貴人ヲ出スベシ

ト云ヒシガ後果メ宰相ニ至ル

芹 (異名) 根白州 水英 苦斷 女菜 (ゼウ) 新撰六帖

まこもの子うたへてゆくへうハ
あまもりつまんやせ川のせう

詞 寿日弥。雪消の沢。淺沢小野
堀。水昔の人月。思ひ草。撫菅
小芹。沼招芹。恋せう。源の花。
雪消の芹。猿の男。沙汰やとる菜

俳 せうつむ。こゝ。そ汐さゝ。そ昆菓
摘まんかるふひまごろ根芹。亀谷

浮草。蓴。芹。流るゝ。あゞれ。其角
うすゝ。ひや。藻。水草。芹の花 同

女菜 芹の事。一説。ハ
せうの外。別。名ぐと

つるるのあるゝ。説。あれ。
七日の若菜七種。十二種。ともせ
アハ。あれ。ぐの名目。
是。以。時。せう。異名。

注 大木。紙。女。ぐ。
や。絵。面。畔。
の。女。山。田。ぐ。
蓴。神。

はるこの形

蓴菜 冬至後萌て生ること二三月
莖とおるゝ護生艸とも云

蓴蒿 順和名曰。あづ。の和名
おもざ。あり。注 夫木

ふ。ハ。て。蓴。の。
蓴。蒿。の。ゝ。
蓴。菜。の。

嫁萩 蓴蒿。
の。ハ。
ざ。貝。右。

嫁菜 雞児腸。云俳 姑。
これ。ある。 塵露

椿 玉椿。椿共云。白玉椿。雪
海石榴。列々椿。伊勢椿。
二階椿等別種。数百種。
○山茶。海石榴。樗。
皆。訓。尚。説。多。
後編。

波薐菜 異名 波斯艸。赤根艸。
波菜。正月。植物。喰

穀精草　裁星州二三月の内田の中に生ず葉石菖のごとく花小さく丸くして白く光あり夜星のごとし　秋くん

素椒皮　山椒皮　山椒の木の皮

雑菜摘　雑菜　摘む春し諸の菜のこと

山葵　山中の水ちろに生ず人家にも作る二月末三月苗生ず

獨活　芽獨活　先ぶきとも云ふ　風ぶきと云ふ　獨活ゆふ名づく

（俳）風しらぬ人の墓ぬしもやうぐ絲桐　季子ともろもろ

○一説には二月の季子ともろもろ

三葉芹　三葉　末より二月苗生ず

喰ふ○一説には正月ふもとる説もあり又二月ふもとる説もあり可考

麋美の花乃匂　お麋る　言葉

苔脯　海苔　海のこと

いろく種類あり次に記す

青苔　乾苔　もく味あり　伊勢出るもの

神化苔　石の上に生ずるもの

於期苔　海中石の上に生ず其うくち

浅草苔　江戸浅草

加太苔　紀州津多出る

櫻苔　色は黄白櫻の花ごとく　三月の季に秀

松苔　松花に似る　十六嶋苔　雲州多く出る

（俳）行水や何ふでまる苔の味其角

青苔や潮さゝれて孫別れ　尺艸

（狂）武蔵ある流れ苔　江戸ろどの源川のもの　信海

神ぬまて海士のうろ苔すす青苔や

ろるとさいふてやまんとやする

鹿角草　鹿尾草　六味菜

海中に生ず形鼠の尾の如く色白

（三）伊勢物語　業平朝臣

ちいあらびむぐれ若ふ孫りまん

のきりのよい神代つくも
(俳)まゑ面ひきぬかれつじ其角

石蓴 若和布ともいく。東海の石まついく生を色青

海雲 海藻こもく其形刮こ
(三)
ろう出る岸和田并對州にう出る多尤
うー。俗あやまりてうぞくこゝ

種植 二月の季又正月也 蒔子 紫蘇 菜漬

移栽 正月移ー栽るゝ上時
能生活をる故なり北日過より
来月十日ごろ迄の中ゝ地氣
ハ月ハ隨てさんなり汐を見て
もろ〳〵氣盛んなる時木の精皆
枝葉にあり是を移ー栽るゝ其性
を破る移ー植るゝ紀土を半分
入樺と以て土をつき堅くもべー
上はやゝうゝなる土を加へ地面より

二三寸高くしては土をもるべき
高く置べゝ〳〵そうえて後半月ゝど
い毎日水を灌ぐべー。まゝ木を
移ー栽る時ハ東西南北のまゝを
木ハ性を置て穴をいつゝうえ
くいろく堀りて根のもゝを
らぬやうに栽べー大木を
鳥居木をたゝくそれハ
てあげてたち根の抑き
ざれやゝ〳〵ハうれをべー

春生類

春の季なれども(三)如此部ハ二月ハ用也

鶯 本朝ゝ唐土ゝ鶯のかゝ
(四)
ちぢゝ〳〵ゝも梅柳ゝ
ゝもゝのゝて乃雅音いひ〳〵
唐土の鶯ハ大さ本朝の鳥ゝ有
身はとゞれて黄色なる鳥ゆ黄
鳥ゝも黄鸝ゝ〳〵嘴と足ハ赤
羽ゝ色ハ黑又日本のうぐひすハ
黄頭鳥ゝ名付て別物也舜水の說ゝ

異名 商庚 鶯 黄楚雀 博奈 黄鳥 容鳥 谷鳥 黄公 百舌

黄鸝 黄飛 倉庚 花見鳥 匂鳥

うぐひす鳥 經鳥 歌鳥 鳥

連 鶯の声ぞ聞くなる梅の花 紅に其角

俳 鶯のうのはいかにうるはしき 鬼貫

鶯の初音やはつゆふぢき 移竹

鶯にとゝまるや梅の花 来山

(一首) 藏玉 花見鳥の證哥

さいとやぼふ春ゆく山里の

初音さてありけるかな

藏玉 みはいとの證哥

山里に春きえすそのうぐひす

梅におそれよ神をひきつて

定家

文治百首

鶯の宿りめ初るこれ乖 み

まうぐふ春れ初りるもあくと

家集 初聞鶯 定家

あくるの年は初音あり春ぶき

鶯の気のそらにたきめる 鶯

弘長百首 竹鶯 為氏

うぐひすのみゝ初の乖 き鶯の

春のはうちふもふ代でよりわる

嘉保哥合 旅宿暁鶯

明れとそいそ紅の三田の山縁より

鶯の声やせ紅乃笑りり

建仁哥合 関路鶯 家隆

雪の白川の笑はなは

あけぬの春の初鶯乃りこゑ

夫木 雪中鶯 小宰相

雪の上に春のまつこと鶯の

あけぐも春いふるの神杉

同 故郷鶯 行能

鶯の春の初音のみやこより

ゆきに去めゆめむひこゑ

夫木 寒野鶯 家隆

あくちの山谷の鶯は追ぬ

ふけぐもいまこゑのあと雪

夫木 松上鶯 小大進

めづらしき松の梢ぐと春の雪

ゆきにとゝまる鶯のこゑ

宝治百首　朝鶯　為家
明ぬまでねぐらの竹のそのかげに
かゝらせてやうぐひすのなく

金葉　山家鶯　摂政左大臣
山里はうきよの中をとほざかれど
谷乃鶯ねをのみぞなく

夫木　田家鶯　俊成
まがきをば秋のをちを松すれば
倚ざまふきとりの声ぞする

同　浦鶯　家隆
鶯のまだふるさとのけふ浪をうく
うらのかたえも咲やしぬる

㊂ 鳴教まつてふうりうそうある。来るく百さぞうぐさふく　谿えの
雪ある本ぞこの雪の中に春が
まがりてある谷　谷は古巣谷の
戸ある軒　軒の鶯。軒端ふきかる
霞　霞の中に霞ふむせぶ霞をつゝ
朝　朝声のまど朝さうすなく　夕
ぐれの声。鶯ぐさなう。霞ふうれ
垣根　垣根をなるはふ竹　竹の鶯ぐう。竹
の葉えでふうける　初音　いとき鳴。

春秋ぞぐる　暮春　行春をくゞる小さな草　梅の木は
にゆへる　友　友とかる。友鶯。梅　梅の花咲
柳　柳うつる宮は鶯る。青柳の糸かゝる。
暁　暁ふく鳴ぐ花ぞこころづくす　巣だち
鶯ぐ鶯ぐうの鶯。鶯の谷は。音はへ
声。今春声。経よむ声。経よむ鶯の笛

㊃ 猿轡で雪ふさたるうくば鶯乃
わう経か経も一ぶ八ふん　次良
梅が枝にとまるその声でんらうくさぶ
口笛ありうひやうらうと鳴す　宗俊

㊁ 鶯五字對句
魚戲（ウヲハタハフル）・芙蓉（フヨウノ）・水（ミヅ）・
鶯啼（ワウハナク）・楊柳（ヤウリウノ）・風（カゼ）
同上
騎擁（キハヨウス）・軒裳（ケンシヤウノ）・客（カク）・
鶯驚（ワウハオドロク）・翰墨（カンボクノ）・林（ハヤシ）
詩文ノタクジン

㊁ 鶯七字對句
林間花雑（リンカンハナマジハル）・平陽（ヘイヨウノ）・舞（マイ）
谷裏鶯和（コクリワウハ）・弄玉簫（ロウギョクノセウ）
花ハ李延年ガてヒスカゼノ如ク
鶯ノ声ハ弄玉カ簫ニ似タリ

詩礎
作春（シュンヲナス）・啼（テイヲ）
始蔵鶯（ハジメテカクスウグヒス）

春山鶯啼修竹裏　センカイヤホユハクウンノアイダ　イグヒスガ竹ニナク

仙家犬吠白雲間　センカノイエ

送好音　オクルコウインヲ

詩　鶯ノ詞　唐　鄭暗

欲轉聲猶渋將飛羽未調鶯巣立

サヘツラントハスレ共羽イトダハヘ名ハタ

高風不飛ントハスレ共羽イトダハヘ名ハタ

借便何處得遷喬　カラダヨリヲイ　ヒトニヨロコヒテ　ヒトニヨロコヒテ

リコレモ巣立ノ鳥ノコトナレバ風カ手傳フコ

ナクハイヅレノ處ニカ喬キ樹木ニウツリ

居スルコヲ得ントヽ

詩　鶯詞　鄭谷

春雲薄々日輝々宮樹煙深隔

水飛　カスミウスク　タル空ニ日景ノトカ

ナル二木ノ間カクレニ鶯ノ飛カヒ

為能歌繫仙籍麻姑乞與女真

衣　能歌　声ヲナス　ユヘ仙家　名籍ニモ

カヽルベシトハ麻姑カ故事ノ如シ

○鶯之故事

鶯梭　梭ハ女の機を織る材と

ふりの〻鶯の梢枝と飛やる様子

のいまを盛かの材と投て機と織ル如

くかるさかるさ

鶯児笛　鶯声を羌

とゝびこてうなるゝ

児の草笛能を吹き

をそむあたゝるを

秦女笙

鶯の初音のこゑやうゝくはりき

を秦王の女子弄玉と云名人

の笙乃ふりろ

仙韶九成　鶯の

きたくぬゝくゝ

声仙家の音樂

ゐ似ゝうしとぞ

金衣公子　鶯を

称美ていゝ詞かり羽の

黄色なると金衣ハ〻ゝ

鳥の囀　水鳥さゝづり　并ニ

諸鳥のさゝづり皆春ノ

百千鳥　春ハすべての鳥さゝ

づると以てりゝく鶯

といふことく鶯の名とかける書もあまたどいひぐさと覚るよう顯

腦の説をうけ[illegible]られし鳥或い鳥の千声をぐしても春るるべし

(俗)古今百子名さへ春いねどに あらぬ[illegible]ぶるゆく人すす

(俳)河上柳に梅ら[illegible] 百ちどり 其角

目刺

白魚の竹の串とまつて白魚の目とつゝぬきはりて賣へ勢ひ専出る

鶯

形鶯より大小黒色声琴と調ふ 似う雄は晴と呼雌は雨とよむ

駒鳥

頭と左右ふりて悦走駒の如し故ふ名つく 春夏能囀

雲雀

日の晴て鳴く日晴といふ心を名づく

干鱈

たらはれるしるく諸國より京師大坂等へ春い多くとりきたる故春の季とするなり

(俳)干たらをさぐる鱈の[illegible]春鳴雲東鯉

春の部終

小笠原渚礼潤法紀 全二冊

此書ハ小笠原の[illegible]時その他法男女の[illegible]礼式ハ云合より七五三礼式[illegible]

商家心得艸 全二冊

此書町人の[illegible]

諸藝古狀揃 全一冊

此書ハ[illegible]

古狀揃精選抄 全一冊

此書ハ[illegible]

天保十二年巳三月

書林

江戸日本橋通 須原屋茂兵衛

芝神明前 岡田屋嘉七

日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛

浅草蔵前二丁目 須原屋伊八

大坂心斎橋筋 秋田屋太右衛門